書 評・紹 介

Samuel H. Preston, *Mortality Patterns in National Populations*

New York, Academic Press, 1976, 210 p.

本書は，著者が1972年から1975年にかけて Population Studies 等に発表した死亡力の研究に関連する7つの論文に加筆し，一冊の著書としてまとめたものである．

本書をここで取り上げるにあたって，本書と密接に関連した，著者ら（S. H. Preston, N. Keyfitz, and R. Shoen）の前著，*Cause of Death: Life Tables for National Populations*（1972：Seminar Press）にふれておく必要があろう．前書は死因別死亡を中心とした死亡力に関する資料集という性格をもっているが，表題の著書は，この資料にもとづく死亡力の人口学的分析編という性格をもつ．そこで，まず前著について若干紹介しておきたい．

Cause of Death……では，死因別死亡率と生命表を世界の広範囲にわたって，また歴史的に統一的な方法を用いてまとめられている．そこでは，世界48ケ国の1861年から1964年の180の人口集団について，男女別に，「生命表」，「複合生命表」，「死因別標準化死亡率」等が最新の人口学的方法によって計算され，表としてまとめられている．これまで，同一フレームによる死因別死亡の資料が歴史的，全世界的規模でなかったことを考えれば，この著書自体が死亡力研究にとって実に貴重なものである．

さて，表題の著書で取りあげられている研究テーマを章題によって紹介すると以下のとおりである．

第1章　序論，第2章　死因別死亡の構造と変化，第3章　寿命と死亡確率に対する死因の影響，第4章　20世紀における死亡力低下への経済的要因の寄与，第5章　死因別死亡と死亡力の年齢パターン，第6章　死亡力の男女差に対する死因別死亡の影響，および，第7章　合衆国における死因別死亡の人口学的，社会的な影響とその帰結，という構成となっている．

個々の章について言及する紙面がないので本書全体に共通する特徴を二点だけ述べてみよう．

第1に，生命表の関数や標準化死亡率と死因別関数の関係に対して経験的な回帰式をあてはめることによって，個々の死因とその構造が死亡力水準にどのように影響を与えているかが分析されている．この方法は，第2章において死亡力水準の低下と死因構造の関係を世界モデル，あるいは地域モデルとして解明するのに用いられている．第5章では，年齢別死亡率パターンと死因別死亡率の関係がこの方法によって分析され，死因別死亡率にもとづく年齢別死亡率パターンのモデル化が行なわれている．既在のモデル生命表（たとえば Coale と Demeny によるものや Brass によるもの）が死因構造を考慮していないという点を考えると，これは今後のモデル生命表の一つの発展の方向を示すものといえる．

第2に，第4章や第6章の論文でみられるように，死亡力水準の変化や横断的格差に対して社会経済的説明を試みている点がもうひとつの特徴としてあげられる．一般に死亡力の水準低下または格差が生活水準や保健衛生と医療技術の向上によって実現したといわれているが，これを実証的に明らかにした研究は極めてまれである．その意味からも回帰分析を用いた社会経済的要因（本書では説明変数として，1人あたり国民所得，教育程度，農業従事者比率，1人あたり医師数，政府の社会福祉関連支出，そして平均カロリー等の説明変数が用いられている．）の影響の分析は死亡力研究の新たな局面——死亡力の変動を社会経済的要因から説明する，死亡力の社会経済理論研究——の今後の発展を示唆している．

以上のように，本書では，生命表の人口学的関数とその性質を利用して，経験的な死亡と死因別死亡のデータを分析するうえで多くの示唆に富んだ研究がまとめられている．

（高橋重郷）